山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第24号(2007. 9)

日本の古代と中世における宗教ならびに宗教者に関する用語

名島　潤慈

Religious Terms in Ancient Times and the Medieval Period of Japan

NAJIMA Junji
(Received July 20, 2007)

キーワード：宗教用語、日本、古代と中世

はじめに

筆者は年来浄土教関連の宗教者の夢について吟味しているが、その作業のなかで宗教・宗教者についてのさまざまな用語が頻出してきているので、ここで整理しておきたい。基本文献としては『佛教語大辞典』(中村，1981)、『角川古語大辞典』の第1巻から第5巻(中村ら編，1982，1984，1987，1994，1999)、『岩波古語辞典』(大野ら編，1974) などを参照する。ただし、これらだけでは足らないので、必要な文献を随時利用する。なお、各用語はゴシック体で表す。また、本文ならびに漢字の振りがなは原則としてすべて歴史的かなづかいを現代かなづかいに変更し、カタカナ表記はひらがなにし、濁点のない箇所には濁点を付けて濁音がなとし、ひらがなばかりのところは適宜括弧のなかに漢字を入れ、踊り字（繰り返し符号）は用いないようにした。

Ⅰ　宗教ならびに宗教者に関する用語

1．戒律の関係

優婆塞は半僧半俗の修行僧。いわゆる在家の信者である。**近事男**・**近士**とも言う（近士とは仏・法・僧の三宝に近く仕える者の意)。女性の場合には**優婆夷**と呼ぶ。**近事女**とも言う。

沙弥は剃髪得度して出家したばかりの見習い僧・未熟僧である。通常、7歳から13歳までを**駆烏沙弥**、14歳から19歳までを**応法沙弥**、20歳以上を**名字沙弥**と呼ぶ。女性の場合には**沙弥尼**と呼ぶ。沙弥尼となった見習い尼は次に六法戒を受けて**式叉摩那**になる。そして、式叉摩那として2年間六法戒を守ることができれば、**具足戒**を受けて**比丘尼**になることが可能となる。2年の間にもしも六法戒を破れば、比丘尼にはなれない。

比丘は具足戒を受けた一人前の僧。女性の場合には比丘尼と呼ぶ。『四分律』によると、比丘の受ける具足戒、つまり**比丘戒**は250戒ある。**比丘尼戒**のほうの数は348戒ある。比丘・比丘尼はもともと、サンスクリット語の「食物を乞う者」に由来している。

戒は仏教に帰依した者が守るべき行動の規則、戒めである。優婆塞・優婆夷の五戒、沙弥・

沙弥尼の十戒、比丘・比丘尼の具足戒などがある。なお、**三帰五戒**と言えば、仏教徒が仏法僧の三宝に帰依することと、仏教徒が守るべき五つの戒め、すなわち①不殺生（生き物を殺さない）、②不偸盗（盗まない）、③不邪淫（姦淫しない）、④不妄語（嘘をつかない）、⑤不飲酒（お酒を飲まない）を指す。上述の優婆塞・優婆夷は在家にあってこのような三帰五戒を受持する者である。**戒行**は戒を守って修行することである。

上述の式叉摩那の六法戒は、五戒の上に非時食戒が加わる。僧尼が午前中に食事することが**斎食**なので、非時食とは斎食以外の時間に食事すること、つまり午後から翌日の日の出までの時間に食事することであり、そのような食事を禁じるのが非時食戒である。

八斎戒は在家の信者が１か月のなかの**六斎日**のどれか一昼夜に限って守る８つの戒律であり、五戒よりも厳しくなる。**八戒斎・八斎**とも言う。六斎日というのは『三宝絵』（出雲路校注，1990）の中巻に明記されているように、月のうちの８日・14 日・15 日・23 日・29 日・30 日である。これらの日には鬼神が人に災いをもたらすので持戒謹慎するわけである。古くは『日本書紀』（坂本ら校注，1965）の巻第 30、持統天皇５年（691）２月の項に「天皇（天武天皇のこと）の世に、仏殿・経蔵を作りて、月ごとの六斎を行えり」とある。

八斎戒の内容は経典によって多少の異同があるが、五戒に加えて、「香油を塗ったり歌舞音曲を見たり聞いたりしない」「昼過ぎからは食事しない」「足の高い床（ベッド）に寝ない」などである。ちなみに、八斎戒は六斎日だけでなく、**三長斎月**にも守られた。三長斎月は『延暦寺首楞厳院源信僧都伝』（東京大学資料編纂所編，1957）に「正五九三箇の月、高尾の蘭若において、斎戒精勤し」（原漢文，文中の蘭若は寺の意）とあるように、１年のうちの正月（１月のこと）・５月・９月であり、在家の信者は各月の前半の 15 日間、八斎戒を守った。

沙弥の十戒と比丘の具足戒は総称して**僧戒**とも呼ばれる。戒を保っている人のことを**持戒者・持戒人・持戒行者**などと言う。戒を受ける人を**受戒者**と言う。**受具者**は特に具足戒を受ける人を指す。戒を授けるほうの人は**戒師・受戒師・伝戒師**などと言う。ここで受戒制度について言えば、日本においては天平勝宝５年（753）12 月に唐の律宗の鑑真（688?-763）が来日したことによって初めて十師による受戒制度が確立された。鑑真は翌年の４月には、東大寺の金堂（大仏殿）の前に**戒壇**（戒を授けるための特別の式場）を築き、聖武太上天皇（701-756）・光明皇太后（701-760）・孝謙天皇（718-770）に菩薩戒を授けた。

受戒に必要な十師は通常、**三師七証**と言われる。それらは、①戒を授ける師主としての**戒和上**、②その場の作法を教える**教授師**、③その作法を指示・実行する**羯磨師**の三師と、受戒に立ち会ってそれを証明する七人の僧である。羯磨師は律宗などでは「こんまし」と言い、天台・真言宗では「かつまし」と読む。

２．僧綱の関係

僧綱とは僧尼を統率し、寺院を監督する官職名である。日本では推古天皇 32 年（624）に初めて僧綱が設けられた。すなわち、『日本書紀』（坂本ら校注，1965）の巻第 22 によれば、ある僧が斧で祖父を殺したので僧を処罰しようとしたところ、百済僧の観勒が抗議したので、推古天皇（554-628）は「夫れ道人も尚法を犯す。何を以てか俗人を誨えむ。故、今より已後、**僧正・僧都**を任して、仍僧尼を検校うべし」と述べ、観勒を僧正に、鞍部徳積を僧都に、阿曇連を**法頭**に任命した。これらのうち、法頭は僧官ではあるが

主として寺院の財産・僧尼の名籍を監督する俗的機関なので（井上，1963）、僧正と僧都が僧や尼を統制する機関となる。

僧綱には僧正・僧都・**律師**の３つがある。僧正は僧綱の最高の位、僧都は僧正の下で僧尼を統率する官職、律師は僧都に次ぐ位で、戒律に通じている人である。律師は**持律師**とか**律者**とも言う。弘仁10年（819）12月25日の太政官符によれば、僧正１人、大僧都１人、少僧都１人、律師４人が定員であった。しかしその後、定員数が増えるとともに僧綱は細かくなり、大僧正・僧正・権僧正・大僧都・権大僧都・僧都・少僧都・権少僧都・律師・権律師の三官十階に分けられた（権とは仮の意。したがって，例えば権律師から律師になるということは，**権官**から正官に昇進したことになる）。

ここで僧綱の例を挙げると、三条天皇（976-1017）は片目が見えなくなるという眼病にかかった。そこで、当時賢人右府と称された藤原実資（957-1046）の日記『小右記』（増補「史料大成」刊行会編，1965）の長和４年（1015）の記事によれば、当時の天台座主であった阿闍梨大僧正の慶円、権僧正の明救、大僧都の慶命、少僧都の文慶、律師の蓮海、同じく律師の心誉、阿闍梨の澄空という７名の僧侶を招いて、５月１日に七仏薬師法を行わせ、５月17日には律師の心誉に不動調伏法を行わせている。

僧綱は後になると、**法印・法眼・法橋**という３つの僧位の総称名ともなった。したがって、**三綱**というと、僧正・僧都・律師を指すこともあるし、法印・法眼・法橋を指すこともある。最初の法印は朝廷が僧侶に与える**法印大和尚位**の略であるが、僧の最高位で僧正に相当する。法眼は法眼大和尚位の略で法印に次ぐ僧位。僧都に相当する。最後の法橋は法橋上人位の略。法眼の次の位で、五位に準じ、律師に相当する。ちなみに僧位は貞観６年（864）に、法印・法眼・法橋の三綱を加えて合計８つの階制となった。三綱以外のものは、伝灯大法師位・伝灯法師位・伝灯満位・伝灯住位・伝灯入位の５つである。

僧の位の低い僧は**凡僧**と言う。平凡な僧という意味ではなくて、僧綱以外の一般僧のことを言う。平安時代の『栄花物語』（松村・山中校注，1964）の「うたがい」には、「南北二京の僧綱・凡僧・学生数を尽したり」とある。文中の南京は南都とも言うが、奈良のこと。北京は京都のこと。南都北嶺と言えば、奈良と比叡山のことを指す。学生は大きなお寺で学問修行をしている僧。**学侶・学徒**とも言う。天台学僧を指すことが多い。もっとも、『日本書記』（坂本ら校注，1965）を見ると、例えば崇峻天皇３年（590）の３月には「学問尼善信等、百済より還りて」とあり、推古天皇16年（608）９月には「学問僧新漢人日文」、同じく推古天皇31年（623）７月には「大唐の学問者僧恵齋」といった言葉がある。結局、奈良時代に入る前の『日本書記』の時代には、百済や隋や唐に渡ってさまざまな仏教を学ぶ僧尼を**学問僧・学問尼**と言い、一般学芸を学ぶ者を学生と言ったのであった。

３．僧の呼び名の関係

沙門は出家した僧の総称名。「さもん」とも読む。名前の前につけることが多い。例えば、源信が985年に書いた『往生要集』（石田校注，1970）の著者名のところは「天台首楞厳院沙門源信撰」と記されている。「天台宗の総本山である延暦寺に所属する首楞厳院に住む沙門の源信が撰集した」という意味である。

大徳は男性の高徳の僧に対する尊称。「だいとこ」とも読む。**老師**は長老の僧に対する尊称。なお、大徳も老師も、次に述べる和尚や和上もすべて名前の後ろにつける。

和尚は高僧の意。広く僧侶一般も言う。読み方は、天台宗では「かしょう」、法相宗・律宗・真言宗では「わじょう」、禅宗その他では「おしょう」と言う。**和上**は和尚と同じ。戒を授ける師。後には高僧の美称となった。前述の**僧綱**は官職名であるが、和上はそうではない。例えば前述の鑑真は754年の来日直後には朝廷から伝灯大法師位を勅授され、756年5月、聖武が死去した直後に大僧都に任じられたが、758年に大和上という尊号を与えられることによって僧綱の任は停止された（安藤，1967）。鑑真はこれによって僧尼・寺院を統括する責任を免れることになり、宗教者としてより自由な活動を行うことができるようになったという。

菩薩は菩薩業という利他行を行う修行者のこと。小乗仏教の修行者である**声聞**と**独覚**（**縁覚**）に対して、大乗仏教の修行者のことを指す。すべての人を救い終わるまでは自分1人だけで涅槃に入ることはないという慈悲の心に基づいている。

菩薩はまた、高徳の僧に対して世間の人々が与える尊称でもある。例えば、行基菩薩（668-749）や日蓮大菩薩（1222-1282）など。前者の行基は世間から行基菩薩と呼ばれて尊敬されていたが、後に**盧遮那仏**の造立のための**勧進聖**として、聖武天皇から天平17年（745）1月21日、日本で最初の**大僧正**に任ぜられた（盧遮那仏は毘盧遮那・盧舎那とも言うが、『華厳経』の教主）。ちなみに、行基を大僧正に任命した時点では、聖武天皇は紫香楽宮（滋賀県）の南の甲賀寺に大仏を造立するつもりであったが、周辺で大きな山火事が続いたりしたため、5月11日には平城遷都が行われ、金鐘寺＝東大寺において大仏が造立されることになった（井上，1987）。なお、天平19年（747）の東大寺の僧綱は、大僧正が行基、大僧都が行達、小僧都が栄辨、律師が行信であった（田村，1999）。

僧名に菩薩号をつけた最初は、天平13年（741）書写の『大般若経』の奥書にある「天平十三年五月中旬**書写法師**報信菩薩」である（田村，1999を参照）。文中の書写法師とは、文字通り経文を書き写す法師のことである。

菩薩僧は、最澄（767-822）が弘仁9年（818）5月13日の「天台法華宗年分学生式（六条式）」（安藤・薗田校注，1974）において述べた言葉。菩薩僧とは菩薩戒、つまり**梵網戒**を受けた僧である。梵網戒は**円戒・円頓戒**とも言うが、5世紀ころに中国で撰述された『梵網経』において説かれた十重四十八軽戒（10の重い戒と48の軽い戒）のことである。比丘・比丘尼の具足戒は小乗戒であるが、梵網戒は大乗戒である。比丘・比丘尼になろうとする者はすべて、①奈良の東大寺、②下野の薬師寺、③筑紫の観音寺という3つのお寺の寺域内にあった戒壇で具足戒を受けなければならなかったが、最澄はそれらとは無関係に、比叡山において菩薩戒（梵網戒）だけで一人前の僧になれるという大乗戒壇（円頓戒壇）を作ろうとした。当然のことながらこの最澄の構想は南都（奈良）の七大寺から激しい抵抗にあい、それに対して最澄は弘仁11年（820）2月29日に畢生の大作『顕戒論』（安藤・薗田校注，1974）を記したが、結局最澄の構想が実現したのは死後のことであった。つまり、最澄が弘仁13年（822）6月4日に山上の中道院で息を引き取った後1週間してやっと大乗戒壇の建立を認めるという太政官符が下されたのである（6月11日）。最澄の弟子の光定（779-858）が嵯峨天皇（786-842）に懇願した結果であった。そして、翌年の2月26日に延暦寺の号が勅許され、それまでの比叡山寺は延暦寺となった。ちなみに、延暦寺という名前はどれか一つの建物の名前ではなくて、比叡山にある天台宗のさまざまな堂塔・僧坊の総称名である。

大師は朝廷が高僧に対して贈る号。死後のおくり名であることが多い。例えば最澄は

822年に死去、最澄の弟子の円仁（794-864）は864年に死去したが、朝廷は貞観8年（866）、最澄に対して伝教大師、円仁に対して慈覚大師の諡号を贈った。なお、835年に死去した空海が弘法大師の諡号を贈られたのは延喜21年（921）であった。その後空海はもっぱら「お大師さん」として人々に親しまれることとなった。

行者は仏教の修行者のこと。宗派や所持している経典によって、念仏行者・法華行者・真言行者などに分かれる。修験道の山伏を指すこともある（修験道とは原始的な山岳信仰と密教とが融合したもの）。行者は**行人**とも言う。「おこないびと」とも読む。仏教の修行者は**道人・道者**とも言う。

貧道は僧が自分のことをへりくだって言う場合の言い方で、**拙僧・愚僧**と同じ。法師や老法師という言葉も卑下の自称として用いられることがある。ちなみに、「法師」という言葉はもともと僧侶に対する尊称であったが、平安時代以降は時代が下がるにつれて卑賤性を伴うようになり、「僧」に比べて格の落ちる言葉になったという（岩松，1996を参照）。

僧の名前には**房号**がついていることがある。房とは僧の住まい（庵室）のことであり、房号は僧の住まいの名。法然房源空の場合、法然が房号で、源空は法名（僧名）である。**諡**ないし**諡号**は故人の功績や徳を讃えて贈られる称号で、法然の場合、江戸時代に東山天皇（1675-1709）から贈られた「円光大師」を初めとして、今日まで合計7つの大師号を贈られている。ちなみに、**諱**は貴人や僧の生前の実名（法名を含む）。例えば聖武の諱は首であり、聖武の父親の天武天皇の諱は珂瑠である（遠山，2007）。**後の諱**と言うと諡のことになる。

4．密教関係

験者は加持・祈祷を行う真言密教の行者。験、つまり霊験をあらわす人。護摩を焚き、両手の指で印を結び、**呪**（陀羅尼、つまり古代インドの言葉であるサンスクリット語の呪文）を唱えることによって病人の体からもののけ（物気，物怪，鬼気）を追い払う。「げんざ」とも読む。**修験者**とも重なるが、験者では験力が強調され、修験者では山岳修行をしていることが強調される（徳永，2001）。験者や修験者が修行して身につけた法力の効果を互いに競い合うのが**験競べ**である。**有験の僧**と言えば、本人が行う祈祷の効力が高い僧のことである。修験道の行者は**山伏**とも言う。**山臥**とも書く。**呪師**は加持祈祷のさいに印を結び、呪文を読み唱える法師のこと。「しゅし」とも「すし」とも読む。**呪禁師**と同義。官名としての呪禁師は「職員令」（井上ら校注，1976）に記されているように典薬寮に所属する官人で、呪文を唱え、もののけを追い払うことによって病を治すことを司る。

よりましは「寄り坐し」「憑り坐し」の意で、験者が加持・祈祷をするさいに**生霊**や死霊を乗り移らせる子どものことである。子どもの代わりに人形が用いられることもある。霊ではなくて、神がよりましに乗り移ることもある。その場合、乗り移られた子どもは神の意志をお告げとして口走ることになる。ちなみに、人に乗り移る霊には動物の霊もある。『古今著聞集』（永積ら校注，1966）の巻第20には、「験者をよびていのらするに、くちなわの霊病者にあらわれて」云々とある。病気直しのために験者を呼んでお祈りをさせると、蛇の霊が病人に乗り移ってしゃべりはじめたわけである。

験者は呪を治療に用いる点で**禅師**と共通しているが、禅師の場合には浄行・持戒を伴う禅行のほうが験力よりも優先される（徳永，2001）。なお、禅師は「ぜじ」とも読む。禅師は後には、道元禅師（1200-1253）・栄西禅師（1141-1215）・白隠禅師（1685-1768）など、

もっぱら禅宗の高僧を指すようになった。**看病禅師**は後述の内供奉十禅師と同じ。**禅者**は禅の修行者。**禅尼**は禅定比丘尼の略で、仏門に入りながら家庭にいる女性。

持経者は経典、それも特に『法華経』を暗記してそらで読んだり、声に出して読む人。持経僧・持経者法師・持経の沙門・法華聖・法華の持経者・法華の持者など、さまざまな言い方がある。持経者という言葉は既に『日本霊異記』(小泉校注，1984）において見られるが、この持経者の「持」は「記憶して忘れない」という意味である（菊池，1995)。『大日本国法華経験記』(井上ら校注，1974）によれば、『法華経』を何年間も一心に読誦すると（声に出して読むと)、仏・菩薩が夢のなかに出現したり寿命が延びたり、見えなかった眼が見えるようになるなど、さまざまな功徳がもたらされるという。

密教寺院では**阿闍梨**（最高位の僧官名）によってさまざまな祈祷が行われたが、祈祷が終わった後、勤修者から願主（天皇や貴族）へ提出される文書が**巻数**である。「かんじゅ」とも読む。巻数は祈祷の内容や成果を願主に伝達するだけでなく、可視的に認識することがむずかしい功験をも願主に届けるという機能を有していた（西，2004)。

5．法師の関係

法師は文字通り法の師。出家した僧のことも言う。僧に対する尊称でもある。例えば唐の玄奘（602-664）は、中国でも日本でも人々から「**三蔵法師**」と呼ばれて崇拝されてきた。この三蔵法師とはもともと、①仏教の「経」(経典)、②「律」(戒律書)、③「論」(論書）の三蔵に精通しているすぐれた僧という意味であるが、普通三蔵法師と言えば玄奘のことを指す。玄奘は唯識教学についての疑問を晴らすため、『十七地論』(ガンダーラの無着が記したと言われる『瑜伽師地論』のこと）の原典を求めて貞観３年（629）８月、長安から遠く天竺（インド）へと旅立った。26歳のときであった。ちなみに、玄奘は夢との関連が大変深い人で、スメール山（須弥山）に登るという吉兆の夢を見て勇躍長安を出立しているし、莫賀延磧という大砂漠で遭難しかけたさいには、夢のなかに出現した一人の大神から「どうして強行しないで、そのまま寝ているのか」と恫喝されて危機を脱している（長澤訳，1998)。

法師は女性の場合、平安時代には**尼法師・女法師**と言った。それより前の奈良時代には、**尼師**や**尼公**が尼に対する尊称・敬称として用いられていた（勝浦，2000)。例としては、８世紀に生きた善心尼師や宝蔵尼公など。尼公は「にこう」とも読む。もっとも、尼公は奈良時代以後もずっと用いられた。例えば、鎌倉時代の親鸞（1173-1262）の妻の恵信尼（1182-1268ころ）は越後から京都の娘に宛てて何通もの手紙を出しているが、江戸時代の本願寺内の目録には「恵信尼公御文　一通」「恵信尼公御書　七通」などとあったという（山崎，2004)。なお、僧尼を統率・統制するための機関である前述の僧綱は男性のみであったが、８世紀の後半に一時的に尼だけを対象とした**大尼**や**尼位**が創設されたことがあった。しかしこれらは称徳天皇（聖武天皇の皇女で,孝謙天皇。後に重祚して称徳天皇）(718-770）の死去と道鏡（?-772）の失脚以後消滅してしまったという（勝浦，2003)。

みそか法師は人に隠れて女性のもとに通ってくる法師（みそかは「密か」で，ひそかにの意)。

中間法師・専当法師・下法師・下衆法師は寺院の雑用に使われる身分の低い僧。**絵解き法師**は中世において大道芸として高僧の絵伝や地獄絵などを絵解き（絵説き）した法師で、琵琶法師が兼業していたこともあったという（渡邊，1986)。**山法師**は比叡山の延暦寺の

僧兵。**山僧**とも言う。**寺法師**は三井寺（園城寺）（滋賀県大津市）の僧。**奈良法師**は奈良の東大寺や興福寺の僧。特に興福寺の僧たちは中世、延暦寺の僧たちと並んで強力の僧兵として世に知られた。**侍法師**は寺院に仕えて警備や雑務にあたる僧。**侍僧**とも言う。なお、**力者法師**は僧侶ではなく、剃髪して院の御所、公家、武家などに仕える下僕で、輿をかき、馬の口を取り、長刀を持って供をつとめた。単に**力者**とも言う。**在家法師**は髪を剃っただけで、家に妻子を養っている法師のこと。**小院**は年少の法師のことである（院は僧の意）。

『今昔物語集』巻第15（山田ら校注，1961）には**餌取法師**という言葉が見られる。餌取とは、鷹狩りの鷹の餌を取るために牛馬の屠殺を行うという仕事に従事する者である。ちなみに、餌取は**屠児**とも共通する。屠児は「えとり」とも読む。延喜14年（914）に三善清行（847-918）が醍醐天皇の諮問に答えて提出した「意見十二箇条」には、「天下の人民。三分の二はみなこれ禿首の者（出家者）なり。家に妻子を蓄え。口に腥膻を啖う。形は沙門（僧）に似て。心は屠児（家畜を殺して肉を取る者）の如し」とある（石井，2003）。ここには形こそ僧侶であるが、その心や行動は堕落している人が多いことが訴えられている。

6．陰陽師の関係

陰陽師は日本独自の陰陽道に立脚して陰陽の術（日にちや方角の吉凶の占い・祭・お祓い・呪詛など）を行う人である。ここで呪詛とは神仏に祈願して誰か特定の人を呪うことで、「しゅそ」「ずそ」とも読む。陰陽師は連声して「おんみょうじ」とも読む。『今昔物語集』巻第19（山田ら校注，1962）には、「川原に**法師陰陽師**の有て、紙冠（祈祷をするさいに額につける三角形の紙）をして祓をす」とある。この法師陰陽師は僧侶の身分を有しているのに陰陽の術を行う人であり、**僧陰陽師・陰陽法師**とも言う。

唱門師は中世における下級の陰陽師で（堀，1953）、人家の門口で金鼓（銅製の丸くて平たい中空の楽器）を打ち、経文を唱え、福を祈って物乞いをした。「しょもじ」とも読む。**唱聞師・声聞師・聖問師・唱文師**などとも書く。**算置の法師**は算木を用いて占いをする陰陽師・山伏などである。

7．有識の関係

已講・内供・阿闍梨の三つの僧職の総称名を有職と言う。一番目の已講は**三会**の講師を務めあげた者で、三会の講師を経て已講になると、上述の僧綱になるのが一般であった。ここで三会とは、①奈良の薬師寺の最勝会（『金光明最勝王経』を講じて国家の平穏を祈る儀式）、②興福寺の維摩会（『維摩経』を講じる儀式）、③宮中の御斎会（宮中の大極殿で僧に斎食を供養し『金光明最勝王経』を講ぜしめる法会で、五穀豊穣・玉体安穏を祈願する）の３つをいう。『日本三代実録』によれば、貞観元年（859）には維摩会講師に請用された僧を明年正月の御斎会講師、同３月の最勝会講師に請用することとなり、これは中世に至っても踏襲されたという（海老名，1993）。

二番目の内供は**内供奉・供奉**とも言うが、宮中の内道場（僧が祈祷する所）に仕える僧のこと。「ないく」とも読む。内供には諸国から徳の高い僧10人が選ばれた。これを**内供奉十禅師**と言う。宝亀２年（771）に比丘10人を選出して十禅師と呼び、翌年の宝亀３年には十禅師に内供奉を兼任せしめるようになった。最澄もかつて桓武天皇（737-806）の内供奉十禅師になったことがあった。内供奉十禅師の主たる役目は天皇の病気の治療で

あり、**御持僧**の役割を果たす。御持僧は**護持僧・持僧**とも書くが、加持祈祷によって天皇を護持する僧のこと。**夜居の僧**とも言う（夜居とは夜の間一定の場所に詰めていること）。ちなみに、十禅師とは勅願によって寺院に置かれた役僧のこと。例としては、比叡山の延暦寺の楞厳院の十禅師尋静など。

三番目の阿闍梨は天台宗と真言宗の僧官の名で、最高位。「あざり」とも読む。授戒の師である。徳の高い高僧のことをも指す。『小右記』によれば、藤原実資は実資自身や実資の妻・娘の病気に際して、天台宗の園城寺の僧である阿闍梨証空を何度も招いて加持を行わせたり不動調伏法を行わせたりしている（竹居，1995）。特に真言宗では、**伝法灌頂**（法を伝えるための，僧の頭に水を灌ぐ儀式）を経て阿闍梨となった。**羯磨阿闍梨**は前述の羯磨師と同じ。**一身阿闍梨**は名門貴族出身の僧に与えられたもので、その人一代限りの阿闍梨。

8．聖の関係

聖は徳の高い高僧のこと。例えば空也上人は世の人々から**阿弥陀聖・市聖**などと呼ばれた。空也よりも少し後の行円（生没年不詳）は皮聖と呼ばれた。行円は常に鹿皮を身にまとい、頭に宝冠を戴き、千手陀羅尼（千手観音の功徳を説いた陀羅尼）を手に持って布教したり、京都の霊鹿山行願寺で法華八講・釈迦講・普賢講などを開催したりした（平林，1962 を参照）。

書写の聖・播磨の聖と言えば、播磨国の書写山を開いてそこに円教寺を建てた性空（910-1007）のこと。性空は「妙法蓮華持経法師」と呼ばれたように『法華経』の持経者であり（菊池，1995）、書写山に入る前は日向国の霧島山や筑前国の背振山で山岳修行に勤しんだ。

聖の語源としては「日知り」「火治り」「非知り」などがこれまで提示されているが、伊藤（1995a）は「霊治り」とみなし、「霊魂を司る宗教的霊能者」が聖であるとしている。**隠身の聖**、**隠身の聖人**は正体を隠してこの世に人間として現れた仏や菩薩のこと。名前ばかりの偽聖は**空聖**と呼ばれる。**遁世聖**は世を遁れて仏門に入り、僧侶としての出世を避けてもっぱら仏道を修行する僧のことをいう。**遊行聖**は仏教の教えを広めるために諸国を歩き回る僧。中世の**三昧聖**は墓守に従事する身分の低い僧（三昧＝墓地）。**御坊・御坊聖**とも言う。

勧進聖は寺社の造営・復興・修繕や仏像の建立のために金品や労力を提供するよう、諸国をまわって人々に勧める（勧進する）僧のこと。勧進は募金活動であり、募金の一部が勧進聖の収入（生活費）となった。固有名詞としては**高野聖**や**善光寺聖**などがよく知られている。ちなみに、大きなお寺には**大勧進職**が置かれた。例えば俊乗房重源（1121-1206）は 1180 年の平家の焼打によって炎上してしまった東大寺の大仏殿を再建するための大勧進職に任命され（これには法然の推薦があったという）、1195 年に大仏殿を再建した。臨済宗の栄西も重源の跡を継いで 1206 年に東大寺大勧進職となった。**十穀聖**は仏道修行のために穀物を断った聖という意味であるが、中世には社寺の勧進活動を行った。遊行聖・勧進聖・十穀聖は浄土宗や時宗系の**念仏聖**と重なる部分が少なくない。ちなみに、漂泊・廻国の念仏聖は近世（江戸時代）に入ると、ある者は浄土宗の寺院の僧侶に、ある者は**道心者**として堂庵に定着し、ある者は**鉦打・鉢屋・茶筅**などに零落していったという（伊藤，1995b）。

勧進比丘尼は**熊野比丘尼**と関係が深い。熊野比丘尼たちは中世末から近世まで、俗に「地獄極楽絵」と呼ばれた「熊野観心十界曼陀羅」を絵解きしながら全国を勧進して歩き、紀州の熊野三山の神社や仏閣の修繕・再興を側面から援助した（萩原，1983）。熊野比丘尼をより詳細に言えば、熊野三山内にいくつかあった本願寺院に居住する**寺付比丘尼**と、本願寺院から免許を受けて諸国勧進に赴く**願職比丘尼**に分かれる（根井，2003）。

聖人は**上人**とも書くが、徳の高い高僧のこと。例としては、『今昔物語集』の巻第11の第8に見える「今は昔、聖武天皇の御代に、鑑真和尚と云う聖人在ましけり」（山田ら校注，1961）など。前出の聖は聖人の略。ちなみに、上人を「うえびと」と読むと、**殿上人**、つまり宮中の清涼殿の殿上の間に昇ることを許された人という意味になる。

9．寺院の関係

籠僧は人の死後49日の間喪屋に籠もって仏事を行う僧。**堂僧**は諸堂に奉仕する役僧のこと。比叡山の関係では、法華堂の**懺法僧**や常行堂の**不断念仏僧**が堂僧と呼ばれていた（佐藤，1956）。ここで懺法とは罪を懺悔するために行う法要のことで、法華懺法は『法華経』を読誦して罪を懺悔する法要をいう（懺法は奈良時代には**悔過**と呼ばれていた）。不断念仏とは日を限って、1日に何万遍も不断に「南無阿弥陀仏」とか「南無仏」と唱えることである（奈良，2002）。

供僧は**供奉僧**の略で、寺院の本尊に仕える僧。**清僧**は戒律を厳しく守って清浄な生活を送っている僧で、その反対が**破戒僧**。破戒の法師とも言う。**三昧僧**は**念仏三昧**や**法華三昧**の状態にある僧（三昧とは妄念を離れて心を一点に集中した状態，精神集中状態のこと）。

導師は**法会**のときに願文・表白を述べて一同を導く僧で、法会の中心人物である。人々を仏道に導く人という意味もある。ここで法会とは文字通り「法の会」で、法要・法事のこと。

唱導は唱導師の略で、導師のこと。**伴僧**は法会や修法のときに導師に従う僧。**請僧**は法会に招かれた僧。**聴衆**は法会のとき、聴聞するためにその座に列している僧のこと。**定者**は**定座**とも書くが、大法会の行道のときに柄香炉を持って前に進む役目の僧。『栄花物語』の「もとのしづく」（松村ら校注，1965）などに見られる七僧は法会のさいに重要な役割を果たす僧職で、**講師**・**読師**・**呪願師**・**三礼師**・**唄師**・**散花師**・**堂達**の七つ。これらのうち、呪願師は**呪願**とも書き、「しゅがん」とも読む。法会において導師が施主の願文を読み上げた後、それに続けて呪願師が呪願文を読み上げる。

堂衆は寺院諸堂に所属して雑役に従事した身分の低い僧。「どうしゅ」とも読む。平安時代末期からは武力を有して僧兵の性格を帯びるようになった。**喝食**はもっぱら禅林（禅宗のお寺）で僧たちに食事のことを知らせる役。「かっしき」とも読む。食事のことを触れ回る役をする有髪の童子のことをも意味する。

別当という僧官名は、東大寺・興福寺・大安寺・法隆寺といった大きなお寺の長官を言う。「べとう」とも読む。ただし、三井寺の別当職は**長吏**、東寺（教王護国寺）では**長者**と呼ばれている。仁和寺では親王が代々の長であったことから、**御室**と呼ばれている。**検校**は寺社の一切の事務を監督する職。**座主**は延暦寺や醍醐寺の長のことである。なお、僧ではない世俗の者が長となった場合には**俗別当**と言う。

承仕は雑役を勤める僧。**承仕法師**とも言う。寺社の内外の掃除・仏具や燈火の管理・仏事における酒食の準備といった仕事をした。**下法師**・**専当法師**も雑役僧。専当法師は**宣道**

法師・船頭法師とも書く。**院主**は寺院の主、住職のこと。**浄人**は出家しないでお寺に住み、僧に仕える人のこと。**新発意**は最近発心して仏門に入った人のこと。「しぼち」とも読む。仏の知恵を求める意を新しく起こした人という意味である。

寺院の名前の前につく**山号**はその寺院が建っている山の名前。例としては比叡山延暦寺、高野山金剛峰寺、長等山園城寺、書写山円教寺などがある。これらは、平安時代に入って山岳寺院が盛んになってからのことである。鎌倉時代以後は、平地に建てられた寺院も山号を用いるようになった。**持仏堂**は、人が自分の信仰する仏を身近に安置しておくためのお堂である。

国分寺・国分尼寺は天平13年(741)に聖武天皇が発した詔による官寺であり、国ごとに、国衙（国府：現在の県庁にあたる）の近くに建てられた。国分寺（国分僧寺）の正式名称は金光明四天王護国之寺、国分尼寺の正式名称は法華滅罪之寺である。総国分寺は奈良の東大寺、総国分尼寺は奈良の法華寺であった。

七大寺とは奈良の七つのお寺で、東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・薬師寺・西大寺・法隆寺のことを言う。藤原京の**四大寺**は、大安寺・薬師寺・法興寺（元興寺）・興福寺（弘福寺）の四つである。

10. 得業の関係

得業は所定の学業を修めた僧に与えられる学階の名前である。平安時代中期以降、①薬師寺の最勝会、②興福寺の維摩会、③同じく興福寺の法華会という３つの法会にさいしては**堅義**（**立義**）（論義問答による僧の学力試験）が行われ、この堅義に及第した僧には得業という称号が与えられた。例えば、法然（1133-1212）は９歳のときに美作国（岡山県）の菩提寺の院主の観覚得業の弟子となった。『法然上人行状絵図』（浄土宗聖典刊行委員会編，1999）の第２巻によれば、観覚はもともと比叡山の延暦寺の学徒であったが学階が得られないのを恨んで南都に移り、そこで法相宗を学んでやっと得業を得た。このように長い時間がかかったので、人々は観覚のことを「久しの得業」と呼んだという。

堅義においては、①**探題**が教理に関する問題を出題する、②学僧である**堅義者**（**堅者**）がそれに解答する、③その解答に対して**問者**が質問・批判し、それに対して堅義者が釈明する、④最後に探題が優劣を判定する、といった手続きが取られた。ちなみに、比叡山の延暦寺では、第18代の天台座主の良源のもと、康保５年（968）に第１回目の広学堅義が開催された（広学とは、天台の学理を究めるために広く内外の典籍を渉猟・勉学するという意味）。

11. 神職の関係

祝は神職一般を指す。「はぶり」とも読む。祝はまた、**神主**・**禰宜**につぐ神事奉仕者を指すことが多い。中世では男性を**祝**・**祝人**、女性を**祝女**・**祝子**と称し、特に女性は**巫女**としての機能を有した（日本史広辞典編集委員会編，2001）。巫女は**神子**・**降巫**・**市子**とも言うが、神に仕え、神の託宣を伝える女性。**御師**は祈祷に従事する下級の神官。**神人**は神社でさまざまな雑役に従った下級の神職。「じにん」とも読む。「賀茂の神人」と言えば、京都の賀茂神社に奉仕する下級役人のことである。**犬神人**は「つるめそう（弦召そう）」「つるめそ」とも言うが、皮沓・弓弦づくりを業とし、さらには死体の始末や墓所の掃除なども行った。日蓮宗の日向（1251-1314）が編纂した『金綱集』には、延暦寺の永尊が同

門の定照に宛てた嘉禄3年（1227）10月11日付けの書状が収録されている（平，2001）。それによると、京都の大谷にある法然の墓所は祇園感神院（今の八坂神社）の犬神人に命じて破却させたという。

斎院は京都の賀茂神社に奉仕する未婚の**内親王**（天皇の姉妹・皇女）。「いつきのみや」とも読む。神に仕える特殊な巫女である。適切な内親王がいないときには**女王**（内親王の宣下を受けていない皇女や天皇の孫）のなかから選ばれた。退下した斎院を**前斎院**と言う。斎院制度は嵯峨天皇の弘仁元年（810）から始まり、鎌倉時代の初めまであった。法然と親交のあった式子内親王（1149-1201）は後白川天皇（1127-1192）の第3皇女で、平治元年（1159）から11年間賀茂神社の斎院を勤め、後の建久1、2年（1194，1195）のころに出家して法名を承如法（聖如房）と称した（岸，1956；今村，1995）。式子は和歌に優れ、「夢の歌人」「忍ぶ恋の歌人」と言われている。ちなみに、式子を「のりこ」と詠むのは角田（2006）による。

斎宮は伊勢国の伊勢神宮（三重県伊勢市）に奉仕する未婚の内親王または女王。斎院と斎宮を合わせて**斎王**（斎内親王の略）と言う。斎王は原則として天皇の即位ごとに新たに選定されたが、なかには村上天皇の娘の選子内親王（964-1035）のような例外もあった。選子は各天皇五代にわたる計57年間も斎院となっていたので、**大斎院**と呼ばれた。逆に、（これは斎宮の場合であるが）母親の喪や自分の病気によって途中で退下したり、男性との恋愛事件によって退下せざるをえなかったりした例が少なからずあったという（中村，1978）。斎王を退いたあとの女性たちの人生は一般に孤独でもの悲しいものであった（田中，1996を参照）。

12. 宗派の関係

奈良仏教は普通、律宗・倶舎宗・成実宗・三論宗・華厳宗・法相宗の南都六宗をいうが、この六宗にまとまるまでにはいろいろなものがあった。例えば、天平19年（747）の大安寺伽藍縁起并流記資財帳には摂論衆・三論衆・別三論衆・修多羅衆・律衆の五つが記されている（「衆」は学衆の意で、奈良時代中期に「宗」となる）。これらのなかの修多羅宗の意味については、かつて石田茂作は法性宗（後の法相宗）、山田孝雄は華厳宗としていたが、井上（1961）は成実宗とする。これに対して大野（1962）は「瑜伽論を主にして成唯識論及び倶舎論を研究する学派で、法性宗に吸収された」とする。一方、田村（1962）は、修多羅宗は『大般若経』に依拠する日本独自の宗であり、大般若宗とでも呼ばれるべきこの修多羅宗は道慈（?-744）によって創始されたとする。このようにさまざまな見解があって未だ特定されていない。

平安仏教はもっぱら天台宗と真言宗の二宗である。鎌倉仏教としては浄土宗・臨済宗・浄土真宗・曹洞宗・日蓮宗・時宗の鎌倉六宗がある。ただし、鎌倉仏教とは言っても、これらの宗派が興隆するのは室町時代以降のことである。

13. 化人の関係

化人は神・仏・菩薩が仮に人間の姿（体）となってこの世に現れたもの。**化身**とも言う。「唐の善導は凡人にあらず。阿弥陀仏の化身である」というのが法然の口癖であった。**権者**・**権化**・**変化**も同じ意味である。権者は「ごんざ」とも読む。変化は**反化**とも書く。『日本霊異記』の上巻には「行基大徳は文殊師利菩薩の反化なり」とある。人間の姿が女性の場

合には**化女**と言う。人間の姿が尼の場合には**化尼**と言う。**聖衆**は極楽浄土にいる仏弟子のこと。**神女**は**天女**のこと。**化像**は、仏菩薩が衆生を救うために仏像や菩薩像の形でこの世に現れたものである。

14. その他のもの

闡提は**一闡提**とも言うが、迷いの世界に執着して、仏を信じる心を持たない人。仏の本願をそしったり、念仏者を見て毒心を起こす人。『西方指南抄』（親鸞聖人全集刊行会編，1980）の中末に収録されているが、法然は、念仏の功徳を尋ねてきた鎌倉の二品比丘尼に宛てた返書のなかで、「善のたねをうしなえる闡提人のともがら（輩）」といった言い方をしている。善の種がないので、極楽往生がむずかしい。ちなみに「鎌倉の二品比丘尼」とは、源頼朝（1147-1199）の妻の北条政子（1157-1225）のことである。

後世者は死後の浄土往生を願う人のこと。『西方指南抄』の下末に見える。後世は文字通りには後の世、つまりあの世のことであるが、「後世を願う」と言えばあの世での安楽、つまりは極楽往生・浄土往生を願うということになる。ちなみに、この世のことは**現世**と言う。『今昔物語集』（山田ら校注，1961）の巻第15には、円融天皇（959-991）の御代に生きた宮内卿の高階良臣は「深く仏法を信じて、現世の名聞・利養をすて、後世の往生極楽の事を心に懸て、昼夜寤寐に法花経を誦し、弥陀の念仏を唱えけり」とある。

知識は**善知識**の略。**善友**とも言う。仏教の教えを説き、人を仏道へと導く善き友人や師のことを意味する。知識はまた、寺社や仏像が造営されるさいに、お金や物や労力を提供する人や団体、さらにはそのような寄進の行為や意志をも意味する。天平勝宝４年（752）に開眼の儀式が行われた東大寺の大仏の造営にさいしては、官から民までのおびただしい数の人々が知識として、銭・米・稲・黄金・布・墾田・材木・牛・鍬・労力などを提供している（魚尾，1981）。なお、**悪知識**は、人を悪へと導く邪悪の僧のことである。

仏師は仏像を彫り刻む職人である。平安時代の大仏師であった定朝（?-1057）は著名。定朝は藤原道長（966-1027）に重用されて法成寺の造仏を手がけ、晩年には宇治の平等院の阿弥陀如来像（寄木造）を造った。治安２年（1022）７月16日には仏師として初めて法橋に任じられ、さらに永承元年（1046）には法眼和尚位を授けられている（大津，2001）。

画師は神仏や聖人を絵にかく職人である。**絵師**・**絵書**とも言う。絵師は奈良時代には画工司、平安時代には画所に所属していた。絵師のなかにはもちろん僧侶もいた。『今昔物語集』の巻第12（山田ら校注，1961）には、「延源阿闍梨と云う極たる絵師を具したまいて、聖人の影像を写さしめ」云々とある（延源は天王寺の別当，聖人は播磨国の書写山の性空聖人）。このように僧籍に入っている仏教絵画専門の絵師は**絵仏師**とも言われる（竹居，1997）。絵に描かれた仏は**絵仏**と言う。特定の仏の場合には、例えば阿弥陀仏の**絵像**と言う。『日本書紀』（坂本ら校注，1965）の巻第27、天智天皇10年の項には**織　仏　像**という言葉があるが、これは織物による仏、つまり織仏である。ちなみに、**生身の如来**と言えば、画像や木像の阿弥陀如来ではなくて、生きている本物の阿弥陀如来のことである。

既述の書写法師は文字通り経文を書き写す法師であるが、**経師**は経文を書き写したり、書き写された経文を巻物や折り本に仕立て上げる職人である。ちなみに書生とは国司の役所の下級官吏で、書記生のことである。既述の読師は法会のときに経題や経文を読む僧侶のことである。

薬師(くすし)は**医師**(くすし)・**医者**(いしゃ)のことである。医師は「いし」とも読む。**薬子**(くすりこ)は元日に天皇に奉られた屠蘇の酒を毒味する童女のことである。なお、薬師を「やくし」と読めば薬師如来のこととなる。

Ⅱ　おわりに

本稿では主として古代と中世において現れる宗教用語について整理した。宗教にまつわる夢の用語については稿を改めたい。

文献

安藤更正（1967）鑑真　吉川弘文館

安藤俊雄・薗田香融（校注）（1974）日本思想大系４　最澄　岩波書店

海老名尚（1993）宮中仏事に関する覚書―中世前期を中心に　学習院大学文学部研究年報，40，63-118.

萩原龍夫（1983）巫女と仏教史―熊野比丘尼の使命と展開　吉川弘文館

平林盛得（1962）平安期における一ひじりの考察―皮聖行円について　史潮，78・79 合併号（平林盛得，1981，聖と説話の史的研究，吉川弘文館，161-197 に所収）

堀　一郎（1953）我国民間信仰史の研究　創元社

今村みゑ子（1995）定家と式子内親王―『明月記』を中心に　文学，6(4)，73-83.

井上　薫（1987）行基　新装版　吉川弘文館

井上光貞（1961）南都六宗の成立　日本歴史，156 号（井上光貞，1982，日本古代思想史の研究，岩波書店，267-290 に所収）

井上光貞（1963）随唐以前の中国法と古代日本　日本歴史，月報５（井上光貞，1982，日本古代思想史の研究，岩波書店，75-82 に所収）

井上光貞・大曾根章介（校注）（1974）往生伝　法華験記　岩波書店

井上光貞・関　晃・土田直鎮・青木和夫（校注）（1976）日本思想大系３　律令　岩波書店

石田瑞麿（校注）（1970）日本思想大系６　源信　岩波書店

石井義長（2003）阿弥陀聖　空也　講談社

伊藤唯真（1995a）伊藤唯真著作集１　聖仏教史の研究　上　法蔵館

伊藤唯真（1995b）伊藤唯真著作集２　聖仏教史の研究　下　法蔵館

岩城隆利（1999）元興寺の歴史　吉川弘文館

岩松博史（1996）「僧」と「法師」の間―『今昔物語集』の用語意識　九州大学国語国文学会　語文研究，81，26-37.

出雲路修（校注）（1990）三宝絵―平安時代仏教説話集　平凡社

浄土宗聖典刊行委員会（編）（1999）浄土宗聖典　第６巻　浄土宗発行

勝浦令子（2000）日本古代の僧尼と社会　吉川弘文館

勝浦令子（2003）古代・中世の女性と仏教　山川出版社

川崎庸之（責任編集）（1983）源信　中央公論社

菊池大樹（1995）持経者の原形と中世的展開．史学雑誌，104(8)，1-36.

岸　信宏（1956）聖如房に就て　仏教文化研究，5，1-8.

小林盛得（1959）六波羅蜜寺創建考　日本歴史，133，39-47.
小泉　道（校注）（1984）日本霊異記　新潮社
牧田諦亮・直海玄哲・宮井里佳（1995）道綽―その歴史像と浄土思想　（藤堂恭俊・牧田諦亮，浄土仏教の思想第４巻　曇鸞　道綽，講談社，219-397）
増谷文雄（2002）無量寿経講話　講談社学術文庫
松村博司・山中　裕（校注）（1964）栄花物語　上　岩波書店
松村博司・山中　裕（校注）（1965）栄花物語　下　岩波書店
三木紀人（校注）（1976）方丈記　発心集　新潮社
三枝樹隆善（1992）善導浄土教の研究　東方出版
長澤和俊（訳）（1998）慧立／彦悰　玄奘三蔵　講談社学術文庫
中井真孝（1980）経疏目録類より見たる善導著述の流布状況　藤堂恭俊編，善導大師研究（中井真孝，1994，法然伝と浄土宗史の研究，思文閣出版，325-356 に所収）
中村　元（1981）佛教語大辞典　縮刷版　東京書籍
中村　元（2003）現代語訳大乗仏典４　浄土聖典　東京書籍
中村　元・早島鏡正・紀野一義（訳注）（1990）浄土三部経（上）無量寿経　岩波文庫
中村　元・早島鏡正・紀野一義（訳注）（1991）浄土三部経（下）観無量寿経・阿弥陀経　岩波文庫
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）（1982）角川古語大辞典　第一巻　角川書店
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）（1984）角川古語大辞典　第二巻　角川書店
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）（1987）角川古語大辞典　第三巻　角川書店
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）（1994）角川古語大辞典　第四巻　角川書店
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）（1999）角川古語大辞典　第五巻　角川書店
中村　哲（1978）斎宮考　文学，46，26-50.
永積安明・島田勇雄（校注）（1966）古今著聞集　岩波書店
奈良弘元（2002）初期叡山浄土教の研究　春秋社
根井　浄（2003）熊野比丘尼と絵解き　国文学　解釈と鑑賞，68:6，163-172.
日本史広辞典編集委員会（編）（2001）山川　日本史小辞典（新版）　山川出版社
西　弥生（2004）密教修法と「巻数」―寺院文書の一側面　日本古文書学会編集　古文書研究，58，1-14.
大野　晋・佐竹昭広・前田金五郎（編）（1974）岩波古語辞典　岩波書店
大野達之助（1962）奈良仏教の修多羅宗の教学系統　日本歴史，174，10-13.
大津　透（2001）道長と宮廷社会　講談社
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野　晋（校注）（1965）日本書紀　下　岩波書店
親鸞聖人全集刊行会（編）（1980）定本親鸞聖人全集第５巻　西方指南抄　法蔵館
平　雅行（2001）親鸞とその時代　法蔵館
竹居明男（1995）僧証空・勝算年譜―不動利益縁起（泣不動縁起）備考　文化史学，51，165-179.
竹居明男（1997）「絵仏師」頼俊再考―頼俊は果たして絵仏師か？　文化史学，53，61-74.
田村圓澄（1963）修多羅宗考　史学雑誌，72(6)，33-45.
田村圓澄（1999）古代日本の国家と仏教―東大寺創建の研究　吉川弘文館

田中貴子（1996）聖なる女―斎宮・女神・中将姫　人文書院
徳永誓子（2001）修験道成立の史的前提―験者の展開　史林，84:1，97-123.
東京大学史料編纂所（編）(1957)延暦寺首楞厳院源信僧都伝　大日本史料 ，第二編之十一，東京大学出版会，298-304.
遠山美都男（2007）聖武天皇とその時代―天平の光と影　日本放送出版協会
角田文衛（2006）日本の女性名―歴史的展望　国書刊行会
魚尾孝久（1981）知識による東大寺大仏造顕とその影響　大正大学綜合佛教研究所年報，3，43-54.
渡邊昭五（1986）絵解きの担い手たち　国学院雑誌，87:6，1-19.
山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄（校注）(1961)今昔物語集３　岩波書店
山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄（校注）(1962)今昔物語集　4　岩波書店
山崎龍明（2004）妻恵信尼からみた親鸞 「恵信尼消息」を読む（上）　日本放送出版協会
増補「史料大成」刊行会（編）(1965)小右記　一　臨川書店